



**札幌医科大学学術機関リポジトリ *ikor***

SAPPORO MEDICAL UNIVERSITY INFORMATION AND KNOWLEDGE REPOSITORY

Title	母性看護学実習前および実習中の学生の健康状態と対象者のケアに対する意識の変化
Author(s)	杉山, 厚子; 吉田, 安子; 丸山, 知子
Citation	札幌医科大学保健医療学部紀要,第 4 号: 29-35
Issue Date	2001 年
DOI	10.15114/bshs.4.29
Doc URL	<a href="http://ir.cc.sapmed.ac.jp/dspace/handle/123456789/6559">http://ir.cc.sapmed.ac.jp/dspace/handle/123456789/6559</a>
Type	Journal Article
Additional Information	
File Information	n13449192429.pdf

- コンテンツの著作権は、執筆者、出版社等が有します。
- 利用については、著作権法に規定されている私的使用や引用等の範囲内で行ってください。
- 著作権法に規定されている私的使用や引用等の範囲を越える利用を行う場合には、著作権者の許諾を得てください。

## 母性看護学実習前および実習中の学生の健康状態と対象者のケアに対する意識の変化

杉山 厚子, 吉田 安子, 丸山 知子

札幌医科大学保健医療学部看護学科

## 要 旨

本調査は、本学看護学科3学年の母性看護学の実習前と実習中の健康状態、母性看護ケアに対する意識、実習・計画・記録等に関する意識を実習終了時に調査し、これらを母性看護学の講義及び実習の基礎データとして役立てることを目的に行った。

その結果、実習中の学生の健康状態は睡眠時間が実習前より約2時間短くなり、体調が悪いと自覚した者が約3倍に増加し、月経周期の規則性は実習前の7割から実習中は6割に減少していた。実習前の学生の女性生殖器ケアに対する意識は、「不安」「驚き」「羞恥心」などの情緒的反応が多く、「看護の視点」が少なかった。実習後は専門職の立場から「看護の視点」で考えるように変化していた。今後、看護教員は学生の健康管理の観点を含め専門職としての視点を高めるための講義や実習の内容及び教育方法の検討が必要と考える。

<索引用語>母性看護学実習、母性看護ケア、臨床実習に対する意識、健康状態

## I. 緒 言

看護教育の主な教育方法には、講義・演習、臨地実習がある。臨地実習は、学校で学んだ知識、理論および技術を実際の看護場面において、個々の対象の状態に応じて適応し、実践することにあると述べられている<sup>1-3)</sup>。つまり実習は、実践したり、検証したり、また新たな体験学習を通して看護の本質にせまり、自己の看護観を養う大切な場であり、実践科学といわれている看護教育においては不可欠なものである。

母性看護学実習では、女性の生殖器に関連する直接的ケア<sup>4, 5)</sup>と同時に短期間で経日的変化の早い対象の看護を展開するために、学生にとっては心理的負担になることが予測される。さらに、少子化に伴い、学生には兄弟が少なく、同年齢以外の人々と接する機会も少ない。従って、母性看護の主な対象である妊・産・褥婦及び新生児と初めて接する機会が多く学生の緊張も強まると考える。

我々は本学部開設当初より、母性看護学実習終了時に、実習前と実習中の健康状態、実習前後の母性看護の特有な看護ケアについての意識の変化、実習、記録、計画等

に関する意識を調査し、講義や実習評価の参考としてきた。今回はこの調査内容をまとめ、検討したので報告する。

## II. 方 法

1) 対象：1996～1999年の札幌医科大学保健医療学部看護学科3学年204名である。

2) 調査方法：3学年の母性看護学実習（3週間）終了時に調査の目的を説明し、無記名自己記入式質問紙を配布し、後日回収した。質問紙の内容は、居住形態、実習前後の食生活、睡眠時間、自己の健康管理、月経の状態、母性看護ケアに対する意識、実習、計画、記録、対人関係の意識等で構成した。実習、計画、記録等については「非常に良かった」「まあまあ良かった」「全く違う」の3段階尺度を用いた。実習前後の母性看護ケアに対する意識および実習で満足できた事項、印象的な出来事については自由記載とした。

3) データ分析：データ処理にはWindows for Excel7.0を用い単純集計およびクロス集計をし、カイ2乗検定を行った。

学生の対象者のケアに対する実習前後の意識について

記述された内容から、学生の情緒的反応を乳房および授乳観察の項目では「不安」「羞恥心」「驚き」「その他」に、外陰部の観察では「不安」「羞恥心」「戸惑い」「その他」に、診察介助では「不安」「羞恥心」「驚き」「拒否」「その他」に区分した。さらに、看護ケアに必要な母子の健康に関わる身体的、心理・社会的情報や状態を「看護の視点」と分類し統計的な処理を行った。

なお、ここでの「看護の視点」とは、医療の専門職者として看護を実践するにあたり専門的知識に基づき客観的かつ意識的に対象者を観察しようとするものとした。

### Ⅲ. 結 果

対象者204名のうち回収の得られた177名（回収率86.5%）について分析を行った。177名のうち男性は7名であった。

#### 1) 生活及び健康状況

表1. 学生の生活および実習前後の健康状態

住 居	家族と同居		96 (52.1)
	1人暮らし		73 (40.6)
	その他		8 (7.3)
睡眠時間	実習前	平均	6.5時間
	実習中	平均	4.8時間
食事摂取	実習前	1日3回	156 (88.3)
		朝食摂取	138 (77.9)
	実習中	1日3回	150 (84.7)
		朝食摂取	146 (82.4)
体調の自覚	実習前	良 い	145 (80.6)
		悪 い	8 (18.8)
	実習中	良 い	90 (48.4)
		悪 い	85 (51.5)
月経周期 (N=170)	実習前	規則的	128 (73.4)
		不規則	37 (28.8)
	実習中	規則的	101 (59.2)
		不規則	64 (25.6)

N=177 (%)

学生の住居は、家族と同居が52.1%、1人暮らし40.6%、その他食事付きの学生会館等7.3%であった。睡眠時間は、実習前が平均6.5時間、実習中4.8時間であった。食事は、1日3回摂取の者が実習前88.3%、実習中84.7%であり、朝食摂取状況は、摂取している者が実習前77.9%、実習中82.4%であった。

健康状態について、体調が良いと答えた者は、実習前が80.6%、実習中48.4%で、体調が悪いと答えた者は、実習前が18.8%、実習中51.5%であった。月経については、月経周期が規則的であると答えた者は、実習前が73.4%、実習中59.2%であった。月経前症状があると答えた者が実習前が69.5%、実習中59.9%で、その症状を

「非常に辛い」「辛い」と感じていた者は、実習前が39.5%、実習中51.7%であった。

#### 2) 母性看護の特有なケアに対する実習前後の意識

母性看護実習では、乳房、授乳、外陰部などの観察、診察の介助等の女性生殖器に対する直接的なケアを行わなければならない。これらのケアに対して学生がどのように受け止めているかについて、実習前後の気持ちを記載してもらった。

乳房観察では、「恥ずかしい」「こんなに变化するんだ」「触って良いのか」「痛くないだろうか」「緊満が無い」「緊満が軽減した」「分泌が良くなった」「不思議」等の記述から「羞恥心」「驚き」「不安」「看護の視点」「その他」の5項目に分類した。

その結果、実習前は「不安」が39.7%と最も多く、次いで「羞恥心」25%、「驚き」12.8%、「看護の視点」11.5%、「その他」21%であった。実習後は「看護の視点」が38.5%と最も多くなっており、「羞恥心」2.9%、「驚き」2.3%、「不安」1.1%、「その他」15.2%であった。

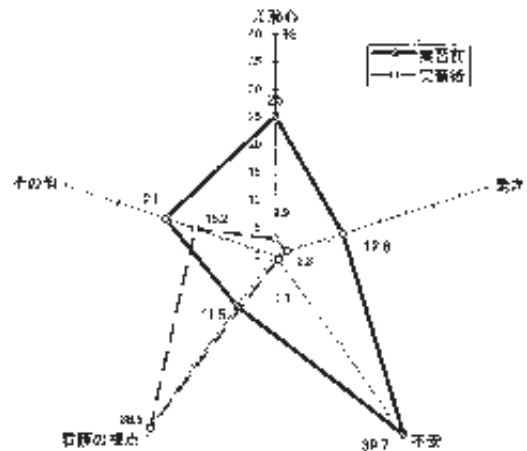


図1. 実習前後の乳房の観察の意識

これらの項目と実習中の体調が良かった者と悪かった者の間では有意差は見られなかった。

授乳観察では、「恥ずかしい」「こんなに大きくなるんだ」「そばにいていいのかな」「赤ちゃんが吸っている」「母子関係は良いか」「正しい授乳姿勢が保持できているか」「兄は乳頭を深く含んでいるか」「ほほえましい」「うらやましい」等の記述から「羞恥心」「驚き」「不安」「看護の視点」「その他」の5項目に分類した。

その結果、実習前は「不安」が39.6%と最も多く、「看護の視点」24.5%、「驚き」13.4%、「羞恥心」8.7%、「その他」43.8%であった。実習後は、「看護の視点」が59.4%と最も多く、「羞恥心」6.4%、「驚き」2.3%、「不安」1.1%、「その他」28%であった。

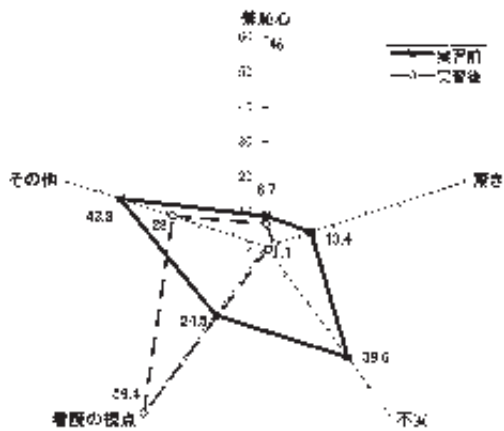


図2. 実習前後の授乳観察の意識

これらの項目と実習中の体調の良かった者と悪かった者の間では有意差は見られなかった。

外陰部のケアは、「恥ずかしい」「怖い」「どうしよう」「ここにいて良いのか」「創部に発赤が有るか」「治癒しているか」「気持ち悪い」等の記述から「羞恥心」「不安」「戸惑い」「看護の視点」「その他」の5項目に分類した。

その結果、実習前は「羞恥心」が24.5%と最も多く、次いで「不安」22.2%、「戸惑い」5.2%、「看護の視点」2.9%、「その他」21%であった。実習後は「看護の視点」が33.3%と最も多く、「不安」7%、「羞恥心」3.5%、「戸惑い」2.3%、「その他」15.6%であった。

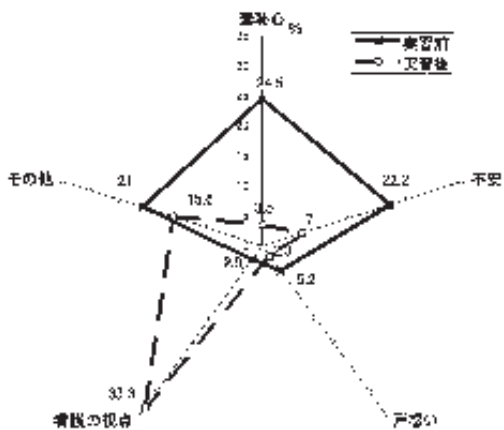


図3. 実習前後の外陰部観察の意識

これらの項目と体調の良かった者と悪かった者の間には有意差は見られなかった。

診察介助では、「恥ずかしい」「怖い」「こんなになっているのか」「見たくない」「良くなっているか」「無心になろう」等の記述から「羞恥心」「不安」「驚き」「拒否」「看護の視点」「その他」の6項目に分類した。

その結果、実習前は「不安」が32.1%と最も多く、次いで「羞恥心」23.9%、「拒否」8.7%、「驚き」4%、「その他」18.7%、「看護の視点」3.5%であった。実習後は

「看護の視点」が33.3%と最も多く、「不安」9.3%、「羞恥心」2.3%、「拒否」3.5%、「その他」20.4%であった。

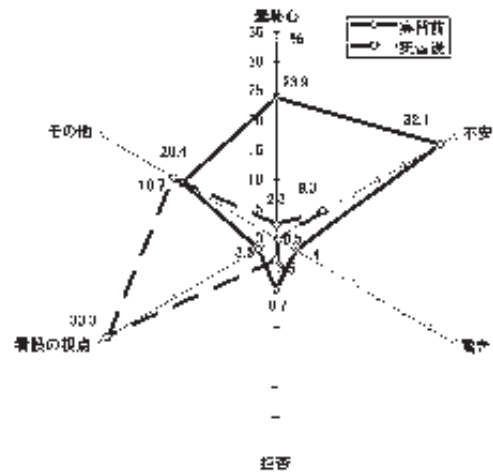


図4. 実習前後の診察介助の意識

これらの項目と体調が良かった者と体調が悪かった者の間には有意差は見られなかった。

### 3) 実習、計画、記録等に関する意識

実習、計画、記録、対人関係に関する意識では、各々の項目において「まあまあそう思う」が約60%以上であった。ここでは「非常にそう思う」と強く肯定した割合について述べる。

実習に関する意識では、「実習の目標が達成できた」「看護に取り組む意欲が持てるようになった」「看護に関心が持てるようになった」の項目で各々3.3%、24.2%、34.4%であった。

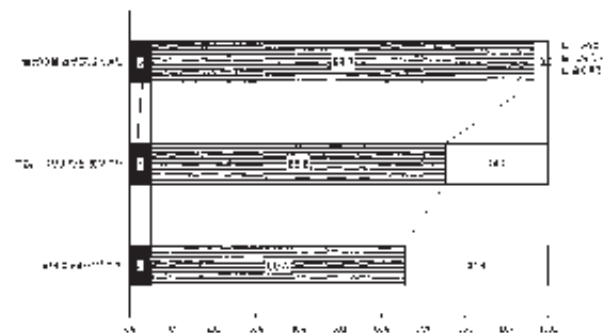


図5. 実習に関する意識

これらの項目と体調が良かった者と悪かった者の間には有意差は見られなかった。

計画の実施では、「対象者の役に立てた」「技術に自信が持てるようになった」「計画通りにできた」の項目で各々12.9%、11.2%、1.6%であった。



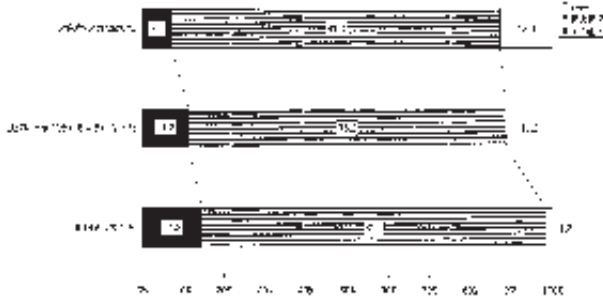


図6. 計画の実施

記録についての意識では、「記録が思考の整理に役立った」「記録が看護過程の各段階に役立った」の項目で各々12.9%、10.1%であった。

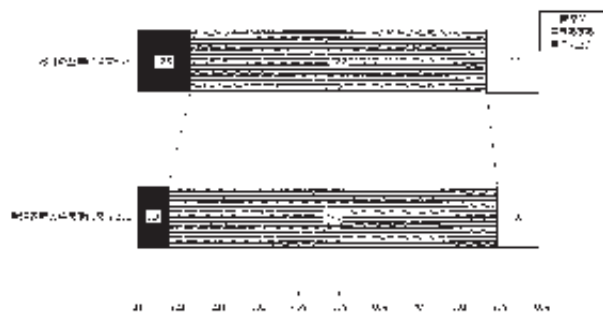


図7. 記録についての意識

計画の実施および記録についての意識と体調が良かった者と悪かった者の間には有意差は見られなかった。

対人関係の意識では、「教員との関係は良かった」「対象者との関係は良かった」「臨床指導者との関係は良かった」の項目で各々39.5%、32.7%、29.9%であった。

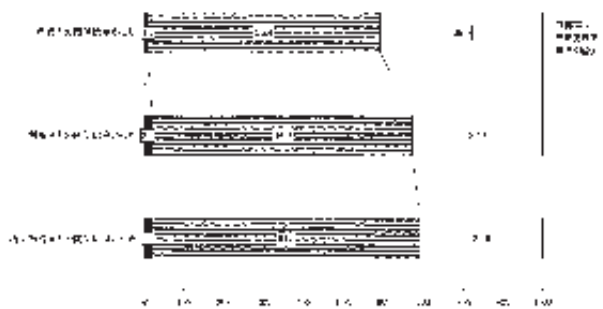


図8. 対人関係の意識

これらの項目と体調が良かった者と悪かった者の間には有意差は見られなかった。

以上の他に母性看護実習で最も印象的な出来事として分娩に立ち会えたことを挙げた者が95%いた。さらに「身体の回復、乳房の変化の早さに驚き予測がたてられなかった」20%、「新生児に直接接触することができた」「沐浴で新生児に泣かれて困惑した」「今まで泣いていた新生児が沐浴と同時に泣きやみ安堵した」等新生児に関することが16%「対象者から色々な話が聞くことができた」14%であった。

#### IV. 考 察

##### 1) 実習前と実習中の学生の生活及び健康状態

学生にとって実習は、生活環境の大きな変化であり、同時に自己の健康管理が重要になる期間である。

本調査では、実習中の睡眠時間は実習前より約2時間短縮しており、吉田ら<sup>6)</sup>の実習と生活の変化に関する調査と同様の結果であり、母性看護学実習に限らず実習が開始されると学生の生活が変化し、特に対象者の看護を展開するにあたり既習の知識不足を自覚し、自主的に学習する時間が増えたことで睡眠時間が減少したものと推測する。

体調では、良いと自覚している者が実習前80.6%で、実習中48.4%に減少し、体調が悪いと感じた者が実習前18.8%で実習中51.5%に増加していた

月経周期は、実習前規則的だった者が73.4%だったが、実習中は59.2%に減少していた。さらに、月経前症状を「辛い」と受け止めた者が実習前40.7%だったが、実習中は54%に増加していた。月経は生理的で健康な兆候であり、周期性を持つことは女性の特徴である。同時に身体的な面だけでなく、精神的にも社会生活上にも影響を及ぼし、生活全般に大きな影響を与えるといわれている<sup>7,8)</sup>。従って実習中に月経が不規則な者や月経前症状を辛いと感じる者が14%増えたことから、実習による学生の心身への影響が推測される。

食事については、1日3回摂取している者は約85%であり、実習前と実習中では変化が見られなかった。朝食の摂取では実習中にやや多くなり、朝食摂取率は同年代の全国平均76%<sup>9)</sup>に比較すると高い傾向が見られた。従って実習中は朝食を意識的に摂取していたことが推測される。

以上の事から母性看護実習に限らず臨床という新しい環境における学習は、学生の緊張を強め、心身のストレスを強くしている事が推測された。緊張が長期間持続することは、学習意欲の低下<sup>10-13)</sup>や学習効果に影響を及ぼすことは多くの研究で述べられており、今後実習のあり方についても検討していくことが重要と考える。

##### 2) 母性看護ケアに対する実習前後の意識の変化

母性看護学実習は、女性生殖器に関連するケアと心身の変化の大きい母子を対象とした看護過程を展開する。学生は、生殖器を直接観察することに対して、実習前は情緒的反応や緊張が強い状態で実習が開始されるといわれている。

本調査では、乳房観察、授乳観察、外陰部ケア及び診察介助の4項目では、実習前は不安が約20~40%であり、

授乳観察を除く3項目では羞恥心が約25%であった。実習後は乳房観察、授乳観察、外陰部ケア、診察介助の4項目ともに看護の視点が約30~60%に増加していた。このことは、時間の経過に伴い、臨床経験を通して看護が提供できることを体験し、看護者としての関心や自覚が芽ばえてきたと考える。それによって看護者の役割を理解し、ケアの重要性を認識できたことにより看護の視点が高くなったものと推測される。

看護学実習において学習に影響する要因として、看護に対する意識、対人関係の意識があるといわれている<sup>14)</sup>。本調査では「看護に関心がもてるようになった」「教員との関係は良かった」「対象者との関係は良かった」「臨床指導者との関係は良かった」の4項目で「非常に良かった」と強く肯定する割合が約30%であった。これらの項目と学生の体調の自覚との間には有意差は見られなかった。しかし、強い緊張が長期間持続することは学生の学習の達成感や学習効果等に影響する事が予測されることから、実習のあり方について検討を深めたいと考える。

記録に関する意識、計画の実施では「非常にそう思う」と肯定する割合が約10%と少なかった。記録はチーム医療を担っている看護においては重要な部分であり、我々は記録する事で思考の整理ができると考えていたが、約13%の学生が全く役に立っていないと答えており、記録の意義が実感できず、実践とのつながりについても理解していないことが推測される。この背景には、記録に対する苦手意識や看護過程の実践と記録のつながりの理解が不十分であることや実習における記録はあくまでも学生個人のものであり医療チームにおける情報<sup>15)</sup>とは理解していないためと考える。

計画では、学生は前日の状況から計画を立案していくが、母性看護学実習の対象の状態は翌日には急速に変化しており、状態に対応して短時間で計画の修正が必要となる場合が多い。しかし、学生はその状況に適應することが困難であり達成感が低くなる事が推測される。この背景には、看護体験が少ないことや変化する対象者の対応への未熟さがあり、短期間にダイナミックに変化する対象者を把握することに困難をきたしたためであると考える。この事はわれわれの研究<sup>6)</sup>において母性看護学実習の達成感や看護を行っていくことに自信が持てた等が吉田らの研究<sup>6)</sup>の実習全体と比較し低い傾向が見られていたことから母性看護学実習特有なものと考えられる。

## V. 結 論

1. 母性看護学実習中の睡眠時間は実習前より約2時間減少し、体調が悪いと自覚した者が3倍に増加した。
2. 母性看護学実習中の月経周期の規則的な者は、実習前の7割から6割に減少し、月経前症状を「辛い」と感じている者が4割から5割に増加した。

3. 母性看護ケアについては、実習前は「不安」等の情緒的反応が多かったが、実習後は、「看護の視点」が増加した。

今後は、母性看護学実習だけでなく3学年の効果的な実習のあり方を学科全体で検討する事と他の要因との関連性についても検討を深め、母性看護学の教育に役立てたいと考える。

## 謝 辞

本調査に協力いただきました学生の皆様に心より感謝いたします。

## 文 献

- 1) 上野範子、宮中文子、真鍋えみ子ほか：母性看護実習指導の手引き。東京、メヂカルフレンド社、1997、p3-16
- 2) 杉森みどり：看護教育学。東京、医学書院、1999、p254-276
- 3) Victoria Schoolcraft, 豊澤英子, 荒尾博美ほか訳：看護を考える人への14章。東京、医学書院、1998、p1-48
- 4) 小野沢康子：臨床実習における看護技術教育の実際。看護教育39：480-486、1999
- 5) 新地裕子、服部佳代子、富倉明美他：看護学生の褥婦性器イメージが母性看護実習に及ぼす影響。日本助産学会誌 12-3：184-187、1999
- 6) 吉田礼維子、岡田洋子：看護学生の実習に関する意識構造と関連要因の検討。天使女子短大学紀要16：19-35、1995
- 7) 山内葉月、松崎久恵、米田純子他：看護学生の月経随伴症状に関する研究。母性衛生 40：130-135、1999
- 8) 松本清一：日本女性の月経。東京、フリープレス、1999、p14-20
- 9) 国民衛生の動向：厚生局。1999、p97-106
- 10) 安酸史子：経験型の実習教育の提案。看護教育 38：902-913、1997
- 11) 安酸史子：学生とともにつくる臨地実習教育。看護教育 41：814-823、2000
- 12) 井関智美、杉本幸枝、土井英子ほか：看護学生の基礎看護技術に対する学年別興味の比較。看護教育 38：123-128、1997
- 13) 川島みどり：今、求められる基礎教育の質。看護教育 38：874-886、1997
- 14) 安齋由貴子、山田あゆみ、大賀明子：看護学実習に関する研究の動向と今後の課題・1。看護教育 35：1122-1127、1994
- 15) 井下千以子：看護記録の認知に関する発話分析-「看護記録の教育」に向けた内容の検討-。日本看護

護科学会誌, 20: 80-90, 2000

- 16) 皆川美紀, 丸山知子, 杉山厚子: 母性看護学実習後の実習に関する意識調査. 母性看護衛生 36: 244, 1995

## Health state of nursing students and their attitude towards maternal care before and during clinical practice of maternal and infant nursing

Atsuko SUGIYAMA, Yasuko YOSHIDA, Tomoko MARUYAMA

Department of Nursing, School of Health Sciences, Sapporo Medical University

### Abstract

In this present study, We investigated the health state of one hundred and seventy seven third-year student at Department of Nursing, School of Health Sciences, Sapporo Medical University and their attitude toward maternal nursing before and during clinical practice in maternal and infant nursing. In addition the student's feeling about this placement was evaluated at its completion to gather basic data about lectures and the clinical practices field.

The result showed that the students slept two hours less and the number of students complaining of poor health tripled during the period of clinical practice. Furthermore, 70% of the students had a regular menstrual cycle before clinical practice commenced, whereas this figure dropped to 60% following this placement.

The students reported having strong emotions including anxiety, uneasiness and embarrassment towards providing gynecological care prior to clinical practice, making it difficult for them view sexual organ care from the nursing stand point. However the students experienced these emotions less frequently and strongly after clinical practice, and were able to observe and provide medical care in a professional manner. Further investigation is necessary to determine which training method sufficiently emphasize the professional aspect of providing health care in the field of maternal and infant nursing.

Key words: Clinical practice, Maternal and infant nursing care, Consciousness for clinical practice, Health state of nursing student